新體詩集

闇の盃盤

岩野泡鳴著

東京
日高有倫堂
發行

本間文庫
文庫 14
D 171

新体詩集

閨の面影

岸野脩一郎著

東京高等師範學校

早稲田大学図書

闇の盃盤

岩野泡鳴

文庫14
D171

闇の　盃盤　闇を　盛りて、
われは　底なき　闇に　沈む。
（本集第八十一頁）

はしがき

この集に收めたるものは、明治三十八年六月出版のわが第三詩集、『悲戀悲歌』以後の作なり。この間にわが思想と情調とに變遷ありたれど、こと更に之を區別せざりき。紙數の制限あるにより、こゝに收め得ざるも多くあれど、そは次集出版の節にゆづり、兎に角、長短六十篇之をわが第四詩集として公にすることとなしぬ。

闇の盃盤目次

短曲

春曉……二
行く春……四
黄がねくちなは……六
黒き花……八
寧ろ夜なれや……一〇
闇を例へば……一三
闇の闇……一四
闇なる岡……一六

君は暗きを……一八
浪の戯れ……二〇
冷たき砂……二三
よみ返り……二四
御霊うぶや……二六
過ぐるぬくみ……二八
二の無言……三〇
黒き素船……三二
渦巻く心……三四
地なる響……三六
千とせの重み……三八
あけぼの……四〇

ゆふぐれ……四二
落日……四四
樂の音……四六
凝りし涙……四八
胸のしぶき……五〇
光のゆふだち……五二
追憶……五四
永劫の力……五六
のろひ……五八
のろひの岩……六〇
二つ花藻……六二
冲のテチス……六四

石をいだいて……六六
細き水の緒……六八
眞白男浪……七〇

月と猫、其の他

月と猫……七二
わがゆらぎ……七四
喘息……七六
闇の盃盤……七八
朝……八二
葉卷のくゆり香……八五
醉中吟……八九
褄とる君……九四

女露男露……一〇〇
闇中悲歌……一〇三
にほひ杉……一〇八
男波の小刹那……一一一
紅の星……一一七
夢はめぐりて……一一八
のろひ……一二〇
日比谷公園……一二三
病室……一二六
枯れ葉……一二九
中禪寺にて……一三〇
この無言……一三二

孤寂……一三三

海音獨白、其の他

海音獨白……一三五
ダナエー獨白……一四五
死獸……一五一
人肉狂賣……一五四
凱旋兵……一六一
朱のにじみ……一七〇

叙事歌曲

黄金鱗……一七五

短曲

（三十五篇）

春曉

またも　思ひ　に　なやむ　日　こそ
來ぬれ、板戸の　ひま　を　漏れて。
白む　臥所　に　夢の　かをり、
殘る　暖み　つつむ　われ　や。

寧ろ　このまま　眠り入らば、
死　をも　知らずに　世　こそ　變はれ。

覺むる　心　は　苦　をも　招き、
苦　をば　いだきて　男泣き　す。

人の　知らざる　憂ひ　多し、
身　をば　起さん　力　失せつ。
白む　臥所　に　夢の　かをり、
ゆるむ　節々　花　を　開く。

春の　あしたの　ねむりごこち、
いまだ　生れぬ　身　にも　あれや。

行く春

春の行きにし跡を追ひて、
われは出で來ぬ森の樹かげ。
朝日寂しく光投げて、
陰府に結べる夢の世界。
青葉顫ひて息を凝らし、
小徑をのぬく露は繁し。
あはれ、その露色も清ら、

昨夜まみえし戀のまなこ。
ランプ綠りの部屋も浮きて、
中に見え透く罪のふたり。
それと一人をいだき寄せば、
影よ、まぼろし——胸にわが手。
春ぞ行きける、露ぞ繁き、
草葉踏みかね、われは覺めぬ。

黄がねくちなは

月は更けたり、眠る草を
静に縫ひ來て光る君よ、
黄がねくちなはかげにばかり
音をば曳きつつ夢に入りぬ。

床はぬくめる闇の樂土、
花は頻りて、花は降りて、

痿えしわが身は痿えし腕に
痿えし長物捲きてあるを——

せめてこのまま土に籠り、
土に隱れて行かば如何に、
斯る戀路の君とわれと。

君はくちなは——されどゆかし——
月と消え行く翌る朝は、
人にかしづく人の妻よ。

黒き花

（妻を失へる老人に）

黒き流は　みなぎりて、
黒き影をば　浮べたり。
浮ぶ姿は　見えねども、
まなこつぶれば　ありありと——
ありし昔の　おもひ出や、
うれひに　映る　愛の花。

若き かをり に　返る　ほど、
深き に　沈む　その花　や、
底なき淵の　闇　ぬけて、
隠れ行きし　か、しほれし　か。
残る　ひとり の　胸　は、ただ、
うつろ　と　なりて　みなぎりぬ——
黒き　かをり の　黒き影、
さらに　黒き　を　増す　ばかり。

寧ろ夜なれや

『肉を洗へ』と　曉の波の
遠き響を　近く　聽けば、
みどり　淀みて　解けし　魂の
かをり　ゆかしく　われを　打ちて、
眠り心の　目　こそ　覺むれ。
九里の　海岸　いまだ　狹霧
かすむ　中より、　白き　七五三　や——

これぞ、ねぢれも　荒く　延びて、
御靈『深み』の　秘義を　圍む。

斯くも　夜あけは　つらき　ものか、
われ　と　海　と　を　二つ　分けて、
われを　小さく　目覺めしむる。
寧ろ　夜　なれや、　とこしなへに
夢を　われ等　は　一に　なさん。

闇を例へば

闇を例へば、海の主の
涌きて夜ぞらの星を凌ぎ、
足は大地のかげを踏めど、
その手二つは空に延びて、
來たるものをば待てる如し。
さなり、わが世はそれの下に

咲きてにほへる夢の園生。
むしろ覺めざれ、戀も花も
とはのかをりに笑みてあらん。
光照りなば、花の露も
戀の生命もしほれ行きて、
あはれ、短き榮えを見じや。
夜るぞわが身をいだくとてか、
肉のまなこを暗ましむる。

闇の闇

あまつ鏡の空を落ちて
千々に砕けし缺けら一つ、
われはちいさく闇に照りて
映す御影を、神よ、知るや。
北に住ひて磨く星の
凄きまたゝき、それにあらず。
遠き冲らの磯に燃えて

罔象かかぐる火かも、あらず。
いとも寂たる海のほとり、
われの光は鉾を隱し、
砂の奥なる熱を追ひて、
過ぎし百世の跡を戀ふる。
生きて死ぬるに何の恨み、
『今』を映せや闇の闇に。

闇なる岡

目をば閉ぢて思へば、
あはれ、親しこの闇の
肉をさそふ物みな
こゝに云はゞ口蝮、
時雨晴れし青野を
ぬめり行きて、ああ、神、

われに殘るたゞこれ
遠く響く泡浪。

それか、あらず——聽えて
胸に滿つる靈の香、
天は深く薫りて、
足場高きこの岡。
光若しも涌き來て
照らば、やがて世の外。

君は暗きを

君は　暗き　を　おそれ給ひ、
世なる　光　に　出づと　すれど、
おもへ、手に　手を　こゝに　飾る
戀　の　花束、糸は　切れて、
乾れし　地のへ　に　しぼむ　時ぞ。
君が　御口　を　漏るゝ　笑み　の

日中　咲きなば、やがて　移る
弱き　をみな　の　末も　見えて、
をとこ心　は　鐵　と　冷えん——
闇は　晝　より、肉は　靈に、
勝る　秘密　の　なからましや。

とはも　斯くこそ——愛しき　君よ、
それと　かをり　を　探り寄りて、
今を　燃え立つ　熱と　熱と。

浪の戯れ

濱は拾里の床を延べて、
こよひ迎ふる客もなきや。
波元白浪横に長く、
銀の細聲消えて起り、
瑠璃と散りぼふ海の子等は
おめず、臆せず、むつれ遊ぶ。
すくと高まるうねの上に

純金を刻める裸形をのこ、
さつと落ち來るおもに浮きて
玉を磨ける亂髪をとめ、
ほくそ笑みつゝ見えて消えぬ。
こゝろ寂しきわれも、今は、
海の御魂に透きて立つや、
またもかれ等は出でておちず。

冷たき砂

ゆふべ　冷たき　砂に　坐わり、
天を　仰げば、いまだ　星の
ゐめる　姿は　一も　見えず、
青き色　のみ　上に　下に
なやむ　わが身を　つゝむ　世界。
昔し　失せにし人の　戀の

恨み、歎きか、海の響。
胸の奥にも　絶えず　繼ぎて、
廣き　濱邊ぞ　身をば　責むる。——
われは　十年　罪を　悔いて、
こゝに　初めて　君に　詫ぶる。
骨は　褪すとも、心のみは、
君よ、眞一度　陰府を　出でて、
清き　ほゝゐみ　われに　示せ。

よみ返り

夢の　まくらに　闇を　響く
波よ、亡者の　よみ返りか。
神は　地塊の　軸に　觸れて、
陰府の　柱は　根より　ゆるぎ、
底つ石棺　蓋は　開きて、
而も　歡喜の　叫び　ばかり――
黑き　ころもに　靈を　包み、

今か、光明　仰ぎ　のぼる。

あはれ、そのかげ　聲と　共に
天の　御中に　進み行くや、
遠き　わらひの　續く　ひまに、
またも　眞近き　鯨波ぞ　起る。
肉の　小部屋に　籠り　聽けば、
魂は　幾萬　海を　振ふ。

御靈うぶや

うごめく　は　これ　何者　ぞ、
牢獄　に　等しき　闇　を　——
ひとつ　か　と　まなこ　据うれば、
その數　は　増して　行く　なり。
まとへる　ぞ　みな　墨ごろも　——
黒法師　——　無爲　の　行列。
暗き　より　暗き　に　入りて、

かへり見る　光　だに　なし。

わが靈　の　なやむ　産屋　か。
相向ふ　かゞみ　の　法師、
相映り、幾多　生まるゝ
代　の　かげ　の　並ぶ　その春　よ。
その春　をば　いくつ　越ゆとも、
この　無言、つひに　死　ぞ　なき。

過ぐるぬくみ

君は　わが手　を　い避け　給ふ、
まこと　戀　には　ありや　えらび。
こ世　の　すがた　を　受くる　先し、
知るや、眞やみ　ぞ　世界　なりき。

魂　は　――　こゝろ　を　狹く　限る
室　の　なければ　――　觸るゝ　ところ、

そこに　乃ち　もの　を　いだき、
過ぐる　ぬくみ　を　たどり　合ひぬ。

その子、その子　は　やゝに　分れ、
かゝる　光　の　もとに　來たり、
木　とも、獸　とも、身　とも　見えて、
かほ　は　互ひに　知らぬ　ばかり。

君も、さあれば、かたち　攀ぢて、
もとの　ぬくみ　を　共に　得ばや。

二の無言

ああ、君、まなこの光を去れよ、
きらめく世界は死のおもてのみ。
相見しおもひ出かたちを焼けば、
飛びかふ言葉の羽をさへ借らじ。
魂もて相戀ふ——これ、二の無言——
おもへば、眞やみの定めをあゆむ。
まことの戀——ああ、いましとわれと

異なる耳あり——その足音を
攻め入る魔としも互ひに聽くか。
こゝろのおそれは肉をも振ひ、
暗きを直ちに手と手をひとつ。

ああ、君、刹那ぞ、この刹那ぞや。
無言に住する常世の蜜は
斯くこそ過ぐなれ、ふたりの胸を。

黒き素船

黒き　素船を　透かし見れば、
砂に　しやがめる　影と　まがひ。
沖の　小島の　薄き　見れば、
人の　思ひに　沈む　けはひ。
空に　住へる　月を　仰ぎ、
寂びし　わが身の　魂と　見たり。

われは　そのまま　まなこ　閉ぢて、
消ゆる　世界を　今ぞ　いだく。

浮けよ、沈めよ、千々の　なやみ、
千々の　悲み、身をば　乗せて。
苦なるいのちは——繁き矢　なり——
積みて　重なる　夢の　小船。
さして　行くへを　こゝに　問はじ、
この夜、この時　われは　活きん。

渦巻く心

闇の烏に　聲もあらば、
暗き　地獄の　窓を　開けん。
斯くも　思ひに　沈む『今』を
われに　奪はん　ものは　ありや。
鐵の　うるしに　固く　閉ぢて、
神の　嘉せし　光　さへも、

見よや、こゝには　影も　なくて、
靈ぞ　エーテル　かをり　高き。

胸のうち　こそ　元の　世界、
日をも　星をも　生まば　生まん。
燃えて　うづ巻く　心　ありて、
物を　形取る　ひゞき　包む。
燃えよ、わが靈、戀の　如く、
われを　燒きても　われは　あるを。

地なる響……

暗き濱邊を たどり來たり、
水際眞近く 砂を 握る。
握る 眞砂の もろき うちに、
闇の力は その尾 振ひ、
手をば つたひて 胸に 響く。

君よ、御空の 星を 說きて、
地なる ひゞきを 忘る勿れ。

遠き 深みの 浪は 寄せて、
幾重 打ちては 疊む 砂ぞ。
たとへ もろく ぞ 碎け去りて、
手には 殘れる 形なくも、
永劫の 憂ひを 布くは 如何に。

暗き 濱邊に 砂を 握り、
君に 云ふべき事 ぞ 多き。

千とせの重み

ああ、この　楠の木、眞直ぐに　延びて、
天　をば　窺きし　その罪　ゆゑか、
斯くまで　曲りて、斯くまで　くづれ——
病者　の　さま　なり——肌へ　の　苔も
苦悶　の　血あせ　に　にじみて　朽ちぬ。
野望　に　生ひ立つ、その　活く幹　の
飽くまで　もたげし　かしら　は　折れて、

千とせ　の　重み　や　いち時　に　受けし。

劫果　の　破壞——こは、わが世　の　苦　をば
却つて　全く　ぬぐはん　ものぞ——
かれ、こを　拒みて　身づから　忍び、
（サタン　か）死力　の　限りを　盡し、
なほ且　はびこる　ふと枝　を　われは
仰ぎて、新たの　力　を　得たり。

あけぼの

いとねむげ　の　浪は　先づ　覺めて、
陸と　海と　こゝに　分れ初め、
海と　空と　冲べに　連る。
遠く　近く　浮ぶ　帆かけ船、
眞帆　を　揚げて　さ走る　進み　の
いとゆるやか、夜　こそ　あけ離れ、

海　の　つばめ――こは　朝の使――
輕く　飛びて、世の目　覺め果てぬ。

砂山なる　砂　を　萠え出でゝ
露　を　帶べる　小草　薄みどり、
深み淵　の　色　に　照り添ひて、
わが心　の、これや、苦なき時。
亡びん　にも　亡ぶ影　見えず、
活くるに　また　活くる　惱み　なし。

ゆふぐれ

人げ　も　なき　濱　の　ゆふ暮　は
死かげ　の　谷、陰府　に　似たる　かな。
雲　は　幾重、横に　また　縦に、
王閻摩羅、瓊矛　の　頬投げ、
青き空　に　そりたる　細太刀。
脊なる　山　は　低く　棚引きて

寂びし霊　の　逃げ去る　を　圍み、
目　を　あぐれば　これ　淀める　淵。
飛び行く　にも　光の羽根　なく、
傳ひ行く　に　つながる島　なし。
風は　静か　浪の穂　を　搖りて、
わが生命　の　末　を　示す　のみ。
今か　此世　は　たとへ　消ゆるとも、
この寂び　こそ　活くる道　あらめ。

落日

むかし　御神の　命を　受けて
此世を　領せし、あまつ彦の
それの　如くや、御座は　落ちて、
光　まばゆき　黄金ぶすま、
雲は　静かに　浄を　圍み、
殘る　衆生の　のぞみ　吸ひて、

銀の鏡の　音も　なくに、
あはれ、世の日は　舞ひて　沈む。

斯くも　赫耀　浄に　入る日、
放つ　その矢の　一つ　だにも
焦れ渡らん　影は　失せて、
有るは　親しき　闇の　深み。
暗き　中より　浪を　聽けば、
純の　黄金の　榮え　ぞ　はゆき。

樂の音

高き　より　落つる　樂のね、
君　や　搖る　むらさきの　幕——
ねぢれ立つ　段階　の　もと、
われは　たゞ　ちいさき虫　か。
戀　のみに　こゝろ　引かれて、
ゴス式　の　窓　も　小暗く、
色がらす　赤　また　青　に、

わが胸　は　うたれて　なやむ。
その　なやむ　ちさき胸　こそ、
今　にして、嚴たる　御堂——
『ハレルヤ』の　聲に、わが　戀ふ
御すがた　よ、神と　浮べど、
かの　御手　に　きらめく　指輪、
持ちぬし　は　既に　ありけり。

凝りし涙

海の おもてを 渡り來たる、
白き 男浪の 音ぞ 愛しき。
われに 乙女の 腕も あらば、
堅く 擁きて、共に 共に
消えて 千尋を 怨ぶべきを。

われは 磯邊に うづくまりて、
北を 受けたる 岩に 似たり。

右も 左も 此世の 風の
吹くが まにまに 心 荒れて、
憂きが 上にも 憂きを 重ね、
凝りし 涙ぞ 斯くは 高き。

あはれ、男浪よ、われは 男、
なれを 友として こゝに 立てば、
すさぶ 胸にも 愛は 涌き來。

胸のしぶき

君と暗きにつれ立ち行かば、
なほも、この手を避け給はんや——
神の光は御冬の濱か、
われらふたりを砂上に竦め、
黒く並べる寒影法師。

たゞにその影隔つる晝は、

戀を呪ひの惡魔の巣なり。
われは、君なる羽がひのもとに、
寧ろ御靈のぬくみを得ばや。
君は、然れども、定めのありと、
おぞや、御ごゝろ太陽に憚りて、
岩に繁吹ける波にも似たり。

夜のひゞきに沸き立つ潮ぞ、
胸のしぶきは火焔と燃ゆる。

光のゆふだち

ああ、初島、南向ける島、
今かその目覺めたるありさま。
黑き潮にかしらをもたげて、
低き身にも罪をや拂へる。
いまだ戸ざす灰色濃雲は
既に高き日かげを見せねど、
雲間よりぞ降り來る金じき、

時にあらず光のゆふだち。
此世は寒き御冬のよそほひ、
波の穗をも雪かとまがへど、
ああ、初島、南向ける島、
かゝるあした覺むる子さち あれ——
射照りそゝぐ朝日の雨あし、
これや聖き救ひのかんむり。

追憶

むかし　別れし　君の　影は
若き光を　髪に　湛へ、
市の　眞中に　われを　呼びて、
『來たれ、いまし　を　母と　共に
尋ね　わびぬ』と、熱き　涙。
われに　冷えたる　胸は　踊り、

もとの　情けの　火こそ　燃ゆれ。
引くが　まにまに　追ひて　行けば、
古き　冠木の　門は　あらず。
家に　坐われば、知らぬ　床に
知らぬ　いろ香の　花を　活けて、
母も　その娘も　すがた　消えぬ。
あはれ、夢なり ― 古き　愛よ、
十とせ　その身を　今は　如何に。

永劫の力

あはれ、御空の一つ星、
戀しの君はいづこぞや。
共に波元に手を取りて、
なれに誓ひし樂しみも、
今は覺めたる夢うつつ。

その初戀のおもひ出は、
夕べの波ともろ共に、

なれに響きてのぼれども、
胸に答へのなければか、
われはあまたの愛乙女に、
または稀なる人妻に、
おもひを寄せてなやむ身ぞ。

戀には二つあるべしや、
なやむは永劫のちからなり。

のろひ

闇に手あり、幾多の
生をもとめ、偶々
君が胸にやどりぬ、
無爲に飽ける その魂。

狹き獄舍にありて、
斯くや もがく その身を。

『世にもをどり出でなば、
さらに延さん いのち緒。』

されど、來なば、光に
こゝろ先づは縮まん。
斯くて、かしらもたげて、
明き御空のろはん。

呪ひにこそ、あこがれ、
闇のちから活くなれ。

のろひの岩

北に　黒雲　涌きて　出でば、
海の　あらし　と　漁夫　は　免る。
君を　見初めて　こゝに　三とせ、
戀の　うれひ　は　廣き　胸　の
浪を　無言　に　荒れて　渡る。

斯くて　死ぬべき　身　にし　あらば、
むしろ　この世の　苦　をも　燒きて、

殘る思　は　沖　の　おも　に
一つ小高く　深み　拔けて、
青き　寂しみ　君　を　招き、
君　を　咒ひて　岩　と　爲さん。

されど、人妻、近く　見ては、
三とせ　言葉　を　知らぬ　風　に
われは　吹かれて、深く　活きん。

二つ花藻

君とふたりし、濱のゆふべ、
波に卷かれて海に入りぬ。
そこも波あり、濱もありて、
靡く磯風――戀のいぶき――
かしら渡りつ、袖を拂ひ、
深く染み入る靈のかをり。

青き光に青きながめ、
われら藻のごと石に立ちて、
二つ並べる影は無言――
近く神秘の岸は開らけ、
さらにか青き岸を迎ふ。

君とわれとは永劫に斯くや、
即かず離れぬ二つ花藻、
つねに沈思の底に醒むる。

沖のテチス

夕べ　繪ぎぬ　に　藍を　溶きて、
遠く　延べたる　海の　眞中、
天に　小高く　かしら　上げて、
ひとり　暮れ行く　烏帽子岩　よ。
白き　泡浪　裾を　めぐり、
音も　ゆるがぬ　しゞま住ひ。

なれを　遙かに　一つ星　の

青き　またたき、それも　落ちず。
草　の　つゆ　なく、花の香　なく、
寂し心　の——これや、いのち。
夢は　深み　の　底に　入りて、
育て來たらん　玉は　何ぞ。

沖　の　テチス　は　月を　孕み、
深き　眞やみに　沈み行くよ。

石をいだいて

石を いだいて、われは 眠る。
夢に 遠波 遠く 寄せて、
白き 眞砂の うへを 洗ひ、
青き 草葉の 道を 濡らし、
高き 深山の 裾に 入みて、
本々の 樹ずゑは 朱に 染まり、
谷と 谷と の もだし合ひて、

深き 秘密は かげを 照らす。

それよ、しぐれの 過ぎし 跡ぞ、
冷えて 覺めたる 旅の ひと夜。
あさ日 寂び照る 石の うへに
落つる なみだも 血しほ 爲して、
秋は 身を 切る 亂れ燒き及、
盡きぬ いのちを 痛ましむる。

細き水の緒

曾て、君、あたゝかなりし
おもかげよ、秋野のするか。
萩は散り、すゝきは立ちて、
悲しみの風ぞ西北。
一もとの樹よりそよぎて、
その蔭のうら寂ぶ野路、
枝を分け、枯れ葉踏み行き、

われは今胸の思ひ出。

野は盡きておもひは盡きず、
戀はまた速き流れか。
近ひゞく琴のね止みて、
白絹のほそき水の緒——
石のへに見る夢のごと、
わが秋は暮れて行くなり。

眞白男浪

（寒き濱邊に立ちて米野口君の南遊を思ふ）

友よ、旅路は椰子の樹かげ、
暑き葉ぶきのむろを出でゝ、
幾代寂びれし一つ島の
磯にしば打つ眞白男浪――
君や、身づから詩とぞ碎け、
こなた小寒の濱に通ふ。

遠く南の風はぬるみ、
あはれ、島かげいとも無言。
夢のまなこを過ぐる如く、
うすら綠のすそを引きて、
君がこゝろは胸に響く。

これぞまぼろし。うつゝながら、
友よ、互ひの聲を離れ、
しばし自然の寂びに飽かん。

月と猫、外貳拾篇

月と猫

樫の樹の間を漏る月の
影は、ふるひて、座に落ちぬ。

誰がゑみまけし魂の
かた碎けぞと、そも小猫——
白き小猫は走り來て、

ただつくねんと見守りぬ。
泡とつぶ立ち、玉と散り、
散りてはつどふその碎け。
白き小猫はざればみて、
つかむとすれば手を照りぬ。
月と猫とは、その夜より、
わが座を和す靈なりき。

わがゆらぎ

暗き日と明き夜は、今、
きぬごろも受けつぐけはひ、
一日の物もひづかれ、
さし引きは空しき袖か。
堀端の枯葉やなぎの

ちからなくさやぐゆふぐれ。
その さやぎ 胸に 渡りて、
わが心 いづれの 影ぞ。
水ぞらを さへぎる 枝か、
水の面に 黒める 幹か。
暗き日と明き夜は、今、
目まどひや 胸の くるめき。

たそがれ は 迫り來りて、
われ のみ の ゆらぎ ぞ 殘る。

喘息

苦しき まゝに
ふと わが目を さます ——
小ぐらき 寐間の
小ランプ くるめきて、

その いきざし も
今 はた 迫り來つ

たゞ じり〳〵と
あぶらを 煮る息は、
油煙に むせび、
燃えさす その光。
くらむ と 見れば、
一瞬 胸を 突き。

喉もと　までも
いのち　は　こみ上り、
血は　くつ返る
刹那　ぞ　なつかしき――
わが世　は　さめて、
わが世　を　いだく時。

闇の盃盤

夢　は　失せにし　玉　の　如く、

覺めて　掴む　と　すれど、　あはれ。
艶　も　光　も　跡　を　絶ちて、
闇　に　のべたる　片手　ばかり。

ゆるむ　節々　ちから　添はず、
戀　も　のぞみ　も　なかば　うつゝ。

まなこ　開らけば、暗き　かもゐ、
あやし　まばゆし　これを　めぐる。

鬼よ、羅刹よ、夜叉の首よ、
われを夜伽の霊の影か。

死はもわが身を獄につなぎ、
肉は魂とも燃えてのぼる。

見えぬ火の中、水の中の
畏怖と威嚇は迫り來れど、

酒のかをりに泡のいのち、
甘き歡樂ねむり誘ふ。

闇の盃盤闇を盛りて、
われは底なき闇に沈む。

かくて夢より夢を浮び、
とこしなへにも生に醉はん。

朝

おもひ悩みの夜を過ぎて、
呼ぶ聲ありとまよひ出つ。
（かしらに細月の
たゞ消え殘る雲の影。）

われやあこがれの
もぬけの門を見張り人。

ゆん手の御寺より、
うち出す鐘も夢の聲。）

胸の透垣透き通り、
見ゆるは君のすがたのみ。
（濱邊の路草に
いとたゆげなる露の目見。）

われは疲れぬ、けふも、亦、
空しき戀をいだきつゝ。

（踏み行く　海路　より、
日　ぞ　きらゝかに　登りける。）
重き　この身　を、君　ならで、
やすむる　御手　の　あるべしや。
（ああ、また、松原　に
わが世　を　歎く　朝は　來ぬ。）

葉卷のくゆり香

ひそかに　君が
つけたる　卷煙草、
葉卷　の　くゆり
この身　に　染めて　より、
かさねて　飽かぬ
出會ひ　の　苦しさ　よ。

よそ目を避けて
會ふ度毎に、君、
熱るゝ胸の
ほむらを訴ふとも、
別れし跡よ、
思へば、人の妻
獨りしあれば、
いよいよなつかしや、
くゆらす煙の

中より見え來なる——
くちびる燃えて、
ひとみを凝らす人。
眉間の色香
拂へど、妄執か——
知力を卷きて
覺むれば、且、凍り、
紅連の熱は
身を燒く阿鼻地獄。

罪　呼ぶ聲　は
底より　響くとも、
はだへ　は　裂けて、
血しほ　ぞ　踊る　われ、
君　もて遊ぶ。
君、われ　もて遊ぶ。
互ひ　の　いのち
今更ら　惜まれて、

苦しむ　ひま　を
樂しき　夢の世　ぞ。
戀　こそ　籠れ、
葉卷　の　くゆり香　や。

醉中吟

四疊半、酒の香　こもり、
蠟燭　の　光　は　暗く
またゝきて、ねむり　を　誘ふ。

黒檀の艶――南國を
忍ばすか――潤み帶ぶるは、
三の絲切れし細棹。

そを執らん力も添はず、
歌ひ女は柱に倚りて、
醉中の淨にや入れる。

いそがしく めぐる眸も、

今はたゞ伏し目に隱れ、
さながらや安坐の佛。

手向けたる金ぶち猪口の
底にして、照らす名文字ぞ
酌ぎ足せし酒にゆらげる。

奇しきは猪口か、その名か。
黄がねなすあまきしづくを
飲みほせば、花降り來たる。

降る花は白き曼陀羅華――
その毒に染みてや、わが目
くれなゐの燃ゆる色あり。

その色の消え去る闇に、
芥子粒の圓きたましひ
あつまりて、巨靈と見えき。

その跡につづくは黒き

ころも數――これ、『悲み』ぞ――
手を垂れて、よよと泣き行く。

暗やみぞ――また、その跡を
音もなく追ひ來る菩薩、
『ほゝゑみ』の蓮華に乘れり。

『これなり』と、われは叫びて、
高飛ぶや餓ゑたる鷙鳥。
『救へよ』と、身もてすがりぬ。

『君も亦醉へり』と、答詞――
ながむれば、かをり ゆかしき
歌ひ女の膝に ありけり。

褄とる君

一

褄とる君の
足音は、深山邊の

奥なる杉の
林に闇を俯せ、
黒がね とざす
めぐりを 脊屈みて、
落ち葉の上を
拔き差す狼の――

それかも、暗き
高樹の樹すゑより、
したゝり落つる

夜つゆ　も　をのゝきて ——
たゞさへ、かゝる
折　には、身　に　入むを ——
と絶えて、跡　の
ときめく　胸　の　寂び。

褄　とる　君　の
しのび　は、墨染め　の
死　と　こそ　響け。
されども、しめやぎて ——

まさ夢くるゝ
軋れば、醉ひどゝち。
手に　手に、森　の
香　を　こそ　さぐり寄れ。

二

褄　とる　君　の
別れ　は、燭臺　の
火　は　燃え行きて、
流るゝ　蜜蠟　の

名殘は凍り、
そのかみ、水盤に
油の玉の
水漬きをおもひ出の——

それかも、胸の
秘密をあばかれて
かばひも得せず、
こゝろは引かれつゝ、
再び會はん

たよりの無きが如、
わが身は全く
冷えたるうるし闇。

褄とる君の
足音は野狐の
逃ぐると聽ゆ。
されども、慕はしく——
おもひのくるゝ
閉づれば、きぬぎぬの

痛まし。ふたり、
世を　こそ　隔つらめ。

女露男露

ゆふ立ち　晴れし
御空の　おもてをば、
青みは　重く
電絲に　たるみ　あり。

その線づたひ
走るは　露　ひとつ、
『眞中に　とまり、
孕みの　機を　待たん。』

ちいさき　胸の
きらめき　散らぬ　間を、
『やよ、待て、しばし』
と、露の　また　一つ。

『一なる　女魂、
　ながの身　の　秘め力
許せよ、共に
　短き　ながめ　ぞや。』——

『二の魂、わが脊、
　君、若し　そを　知らば、
われら　の　望み
　今　こそ　滿ち足らめ。』

渠等　は、斯くて、
　ひとつに　煌めきぬ。
落ちし　は　二つ、
　消え行く　元の露。

闇中悲歌

あゝ、闇の矢　よ、
　うつろ　の　胸を　射て、
その數　あまた、
　抜きさす　餘地　も　なし。

われ、針ねずみ、
針みな逆生えて、
まろべば深き
痛手の疼くのみ。

樂しき小夢
その影畫の間の
光と消えて、
こゝろはうるし室。

戸ざせる窓の
しめりは黒くして、
暗きに乾く
御靈の見ゆべしや。

苦しき肉の
癈ひ目をしぼりづる
涙や、實にも、
やみ夜の闇映す。

神ら は 亡び、
望み も 失せし 世 ぞ、
おのれ を 追ひて
生き死ぬ 物 の 呼吸 ——

はじめ の 呼び に
潜める 獸 動き、
次ぎなる 吸き に
むくろ は 開けつゝ。

ああ、この闇 に
醒めたる われ は あり、
刹那 に つゞく
死の苦 を こそ 思へ。

隣り の 水車
かたこと 音絶えず、
わが胸 深く
悲痛 を 刻む なり。

にほひ杉

大谷川　行く水　早く
さそふとも、御空　に　高ら、
いや増しに　さかゆる　杉　よ。

數百年、數百　の　幹　は
御山邊　の　坂　と　もろともに
延び立ちて、御やしろ　深し。

奇し御魂、神秘　の　闇　を
高ら枝　の　しげみ　蔽ひて、
鼻さき　を　のぼる　いし段。

つち　近く　人　は　這ひつゝ、
いつまでか　暗き　さまよひ　——
而も　なほ　あゆむ　と　見るや。

思へ、この　木々　の　親　さへ

印度には すでに 倒れて、
その影を 奈落 より 引く。

わが足の 音 とも 見えず、
こつこつと 物か の けはひ ——
たゝずむ は『をのゝき』なりき。

時こそは 如法暗黑、
樹の間 より 漏り來る 星 の
光 ともにほふ は 何ぞ。

今や、われ、犬なる人か。
おぞけ立ち、夜つゆを 浴びて、
暖國の きざしに 醉ひぬ。

男浪の小刹那

物おもふ
まなこに 開らけつ、
寄せ來たる
男浪の 小刹那。

遠つ海の
奥なるひゞきを
揚ぐるかや、
寂しき目の前。

いと白き
うねりは——力ぞ——
青よどむ
そらをも乘せたり。

七重八重
その道折れ來て、
おほ地の
御胸を打つなり。

その音は
虚空をめぐりて、
わが身はも
立てるは釣り殿。

この　地球
つち　より　亡ばゞ、
なれ、海　に
増すらん　秘密　ぞ。

わが戀　を、
はた、わが　望み　を
はぐゝまん
冲べ　の　ふる郷。

いにしへ　の
テチス　が　住ひ　も、
實に　今は
ひそみて、わが胸。
吹き渡たる
大氣　に　ゐぐりて、
眞空　を
いだける　この生。

湧き返る
いのち を 仰へて、
今 こゝに
御靈 に 向へば、
物思ふ
まなこ に 開らけつ、
寄せ來たる
男浪 の 小刹那

紅の星

闇 を 落ち來る 紅の星 よ、
根なく、榮え なく、光 あらず。
枯れて しぼみし 世々 の 地塊、
繁く つゞきて 目 をば 横ぎる。
あはれ、その道 風 を 起し、

音は遠きを引いて叫ぶ。
畏怖と威嚇は渦と殘り、
覺めしわが魂夢とめぐる。
われは生々、ここに振ひ、
星の行くゑに耳を開らく。

夢はめぐりて

夢はめぐりて花と咲きぬ、
川のつゝみの目ざましさよ。
曉の夜羽根は水に流れ、
殘るかすみは枝にゆらぐ。
示めせ姿を、鳳の鳥よ、
ゆふべ見えしは尾羽の破ぶれ。
われはそのごと常に破れて、

かをる　光の　裾　に　迷ふ。

あはれ、この花　ねむる　ままに、
春　と　散らばや　戀　も、魂　も。

のろひ

君　より　得てし
愛の根　ありとせば、
わが世　は　直ぐに
のびけん　くるま菊。

君　ある　方を
日なた　と　向き直り、
黄がね　の　花は
おほ輪　に　咲きけんを。

しのびの魔　ゆゑ
根　さへも　抜き取られ、
つめたき　闇は
わが世　を　飢やす　のみ。

なさけ　の　かたゐ、
かたち　を　かき消しぬ ——
氷と　冷えて、
のろひ　は　君　まとふ。

今　人妻　の
苦しみ　うべなれど、
そは　見殺さん ——
わが身　の　苦を　知れや。

日比谷公園

あはれ　は　あれど、
そと　だに　近よれず、
年増　の　威嚴
噴水　あとに　消ゆ。

響くは　かなた
管樂　オペラの曲、

いとしめやぎて
市中を雨に呼ぶ。

松本樓に
あつ物すする客
顔赤くして、
秋雨醉ひを帶ぶ。

日比谷の秋の
香にこそしのばるれ、

かの　まよはしの
ゑまひのおもかげや。

胸にし秘めて、
公園もあゆまるる。
見え來ば君を、
されども、唾に吐かん。

病室

あざけり の
惡魔 あり、
かしら を 蹴つ と 目は さめぬ。

闇夜 なり、
狹き室、
枕に かよふ 息 ばかり。

寢がへれば、
いち道 の
光 まばゆく 輝きぬ。

その かげ に、
わが戀 の
姿も ちらと 浮びける。

束の間 ぞ、

ただ　しばし、
思ひ出　こそは　親しけれ。

身は　やがて
朽ち行かん、
ただ　惜まるる　息の色。

紫　に
朱を　點じ、
そはも　沃度　の　にほひ　なる。

枯れ葉

枯れ葉　にも　魂　は　ありける、
靜かなる　空　を　花蝶。

とりどりに　舞ひつ、纏ひつ、
音　を　しのぶ　別れ　の　歎き。

高幹　の　枝　に　さかりて、

沈み行く　二の世　や　いづこ。

ひとつ枝に　またと　見まじを、
親しみ　は　苦の　穂ずゑ　のみ。

中禪寺にて

黒く　よどめる　水の　おも、
油を　延べし　海の　如。

ひたり、ひたり　と　櫓に　なづむ、
音　さへ　おもき　わが　こゝろ。

遠く　君　より　離れ　來て、
暮れ行く　けふ　の　寂しさ　よ。

舟の　行くゑ　に　引かれて　は、
わが身　も　消えて　入る　おもひ。

この無言

ああ、もみぢ葉は、死の川の
黒きに染みて、沈みけり。

その黒染めの深淵を
くゞり行きけん、眞すがたよ。

世の秋風は寒くして、
手には殘れるこの無言。

孤寂

（夫人を失へる人に代りて）

庭の青葉の靜かげに
呼ぶ聲ありと立ち出でぬ。

呼ぶ聲見えず、この孤寂、
わがまぼろしは破れつゝ。

陰府まで暗く透き通る、

その　思ひ出　の　心ながれ。

去りにし　花　の　小姿　を

それぞ　と　抱く　よしもなし。

海音獨白、外五篇

海音獨白

一

父　には　捨てられ、母　には　別れ、

物乞ふ　袋　と　共に　まろび、

或村　はづれ　の　山根　に、ひとり

甘乳　の　流れ　を　呼べど　出でず。

稚き　こゝろ　は　七島、八島、

伊豆　吹く　いなさ　の　風　を　痛み

どよめる　海邊の　小浪に　つれて、
消え行く　身　なりき　――　今は　昔。

二

べに貝、小砂の　しめれる　道を、
かもめの　足跡　かろく　踏みて、
たまたま　過ぎ行く　托鉢和尚、
我慾と　おのれは　空し　眞袖。
無垢衣の　ひらめく　両手を　延べて、
拾ひし　珍貝　紅に　あらず、

つゞれに　まつはれ　その世を　叫ぶ、
ああ、わが身　なりき　――　それも　知らず。

三

伊東の　山腹、さくらの　御寺、
松月院主の　めぐみ　ゆたか　――
三界　衆苦を　救へ　にのみぞ、
その實、嘗めし　は　海の　ながめ。
相摸の　灘　さへ　平らに　霞み　――
白帆の　孕みし　兒かも　――　われは

あさゆふ　讀經の　つとめを　盡し、
樂しく　わが師に　つかへたりき。

四

夜ごとに　持ち出す　妙法華經、
柔和の　御言葉　序品講ず。
われ、その　御聲に　有結を　拂ひ、
諸漏なき　阿羅漢、時に　現ず。
沈思の　彼岸に　至れる　魂は、
されども、斯くて　ぞ　つゞかざりき。

或時、あはれや、惡夢の　如く
わが身の　昔を　知れば、無恃怙。

五

忽ち、胸にも　おほ浪　立ちて——
わが身は　わが師の　賜びし　名　なり——
海音、どよみて　狂ふ　は　血しほ、
ひそかに　念じて　これを　喝せど。
たとへば　佛　あり、迷へる　衆生
そこばく　百千　浮ぶ　如く、

悲痛の數々俄かに湧きて、
わが寂しみこそ深く覺むれ。

六

今年、殊なる彌生を迎へ、
わが師の親しみさらに增しぬ。
父とも思へば、失せにし母の
遠きに住してわれを呼ぶか。
あさ起き出づるや、御墓に詣で、
はじめて名乘るもなみだばかり——

時しも、かたへに櫻の一枝、
わが名を語りてゐる女あり。

七

渠、その初子を土中に呑まれ、
苦愛の絹糸に引かれ來たる。
朝なり——あらたの光も添ひて、
御手なる花には露を帶びぬ。
その優言葉に、久遠の慈母も
斯くや、と、わが脈天鼓の如く

おのづと　折ちては、ぬくもる　はだへ、
血しほ　は　いつしか　逆に　のぼる。

八

世尊の　方便、藥も　美味も、
この毒　受けては　ちから　具せず。
戀慕は　乃ち　渴仰なれど、
かの女は　人妻、われは　孤露ぞ。
日々、障子の　かげより　見れば、
夢路に　咲き行く　普賢菩薩——

ああ、その　靜散る　薄くれなゐの
一瓣を　なりとも　門に　追はん。

九

仁王の　力味も、無形の　魔鬼を
防ぐに　由なき　春の　精舍。
戀ゆゑ　ならば　ぞ、わが　撞く鐘の
ひゞきは　笑ひて　照らす　境。
聳ゆる　御寺の　柱に　寄りて、
如來の　香爐の　くゆり　聽けば、

おごそかなる　かな、わが師　の　おもて——
聖なる　寂しみ　熱く　涌きつ。

十

暗き　に　燃ゆる　は　うつゝか　夢か、
まなこを　閉ぢても　開らく　堂宇。
左右　の　柱は　照り　輝きて、
その火　は　巨龍　の　欄間　つたひ、
ほのほ　の　舌　もて　讀經　の　つくる
燒くよ　と　見る　間　や、聲　を　擧げず、

戀しの　すがた　は　眉間　に　現じ、
御經　を　さゝげて　われを　招く。

ダナエー　獨白

（シモニデースの作なる艶歌斷篇の面影を偲びて、新たに作れる）

父　に　追はれて、ダナエー　が
その　隱し兒　と　波　の　うへ。
あまつゼウス　を　箱ぶね　に

あこがれ　渡る　この戀　や。
乾ける　土を　盛りたる　身、
沸き立つ　潮に　ひたりなば、
解けて、碎けて、おのづから
抱き兒の　寐がほ　見えまじを——
闇と　あらしの　迫り來て、
安きは　所天の　かたみ　のみ。

あはれ、不安と　かなしみ　の
火もて　ほてれる　わが目　には、
海の　ちからの　高どよみ、
遠く　燃ゆる　を　見し　こゝろ——
ああ、神ゼウス　身に　觸れて、
もろき　いのち　は　見えそめぬ。

もろき　いのち　の　見えそめて、
朽ちぬ　榮え　ぞ　うらみ　なる。

ああ、燦爛　や、天の座　は
高き　どよみ　に　乘り來たる。

この兒　を　受けて、おほ御つま、
御座　の　ほとり　に　そだてしめ、
みが　常聖　の　血すぢ　をば

アハヤ　の　勇者　たらしめ　よ。

朽つる　宿世　の　身　なれども、
こゝに　せめて　の　のぞみ　あり。

聖き　榮え　の　照らす　間　ぞ。
この　まぼろし　の　見ゆる　間　ぞ。

まこと　の　闇　よ、いざ、さらば、
その手　を　延して　來れかし。

うらみ　と　歎き、死　と　つち　を
この　はこ船　に　くつ返し、
深き　ひゞき　を　つたひ來る、
熱　にぞ　われは　燃え　あがり——
ほのほ　と　成りて、まのあたり、
戀しの　神　に　したがはん。

死獸

御星　の　定め　よ、か深き　森　の
樹の間　を　漏りては、ああ、その　死毒。
聲なき　雨　と　や　射そゝぐ、征矢　の
一つ　に　當りて　手負ひし　雄猪。
ひそめる　生の火　忽ち　燃えて、
まろぶ　は　奇し魂——　怒り　の　火焔。

あらゆる　力を　まなこに　籠めて、
眞やみの　小洞を　逸りてや　出でし。

あま聳り　立ちけん　火ばしら、根より
折れたる　いきほひ、いち時は　眞晝。
風　切る　響きを　暗きに　引きて、
ま直ぐに　驅け來つ　開らけし　枯野。

草木の　觸るゝを　熱れに　燒きて、
はてなき　大地を　たゞ　馳せめぐり、

御空に　輝く　その　星々の、
かしらに　迫ばまる　苦を　こそ　堪ゆれ。

おのれと　おのれの　苦悶を　握り、
獵師を　離れて　叫び　は」悲し。
いのちの　驅り輪　次第に　狹く、
その身を　かこひて　つひにや　逝ける。

ゆふべの　戰ひ　破れし　武者の
あしたや、死の床　しら露　しとど。

牙歯持つ むくろの毛も逆立ちて、
見よ、その威嚇は小夢と冷えぬ。

人肉狂賣

『肉を買へや、赤き肉を、
われは娘の肉を持てり。
肉を買へや、人の肉を、
われは娘の肉を賣らん。』

『あはれ、翁よ、その籠に
盛りたる肉は生血垂る。
いかで、翁よ、そを持ちて、
人の子肉を賣るといふ。』

『遠く放つ砲の彈丸に、
子等は打たれて早く亡び。
近く寄せしいくさ人に、
妻は犯され、耻ぢて死にぬ。

『清の國に政治あらず、
民は野に伏す獸の如し。
利器を夷狄運び來たり、
あはれ、自在に狩りて暮す。』

『さらば、そが爲め、生き殘る
娘や切りて賣らんずる。』

『さなり、家のうさぎさへも、
擁く その子の數を計へ、

子等の日々に減るを見ては、
殘る一つを食ひ隱す。』

『それは毛物よ、人ならば、
稱ふる道のあるべきを。』

『正義何ぞ、平和何ぞ、
われに何等の致すあらず。
北京政府弱きばかり、
かれ等おのれの威をば振ふ。

『肉を買へや、赤き肉を、
われは娘の肉を賣らん。
いまだ曾て穢れなきを、
われは殺して刻み持てり。』

『なれは狂へり、いざ、今を
行くべき方に從へや。
こゝろ求むる物あらば、
來りて告げよ、わが陣に。』

『既に愛しき妻子あらず、
のがれ行くべき穴も失せぬ。
飽くを知らぬ他國人に
之し與へば われは足らん。

『肉を買へや、赤き肉を、
われは娘の肉を持てり。
無辜の民を屠る上は、
人の肉をも來り食へ。』

『來れ、狂者よ、その口を
つぐみて われに 從へや。
いかに 狂ひて あればとて、
わめきて 泣く を 許されじ。』

『何ぞや ―― 野邊を 走る水の
光る つるぎに 身をも 召すや。
肉を 買へや、赤き肉を、
さらば この身も 共に 行かん。』

凱旋兵

『吾子よ、あはれ、八幡、
無事に 歸り 來しか』と、
母が 熱き なみだの
顏は 消えし その跡 ――

『われも 母ぞ、うらみや、
愛しき 娘 失せたり。

清き　肌は　裂かれて、
耻ぢ　陰府に　寄せたり。
『思ひ知れ』と、苛責の
杖は　重し　その都度、
燃ゆる　まなこ　ありあり――
これぞ　秘せる　家づと。
『君よ、あはれ、金比羅、
つゝがなくて　斯くや』と、

妻が　籠むる　なさけの
姿　消えし　その跡――
『われも　妻ぞ、うらみや、
ちから　なくて　この罪。
戀ふる　人を　隔ちて、
こゝに　陰府の　わび住み。
『思ひ知れ』と、苛責の
聲は　近し　この褥、

闇に滿つる密事の
悔ひぞ深き胸底。

むしろ毛物なりせば、
それも常の快樂。
なまじ勝ちに狂ひて、
餓ゑを滿てし罪惡。

劍を拔かば、まだしも
血液と朽る小あし手、

弱きまゝにひそめて、
墓に追ひしおもひ出。

心の臟にからみて、
無辜の民のわざはひ。
兩の肺にすがりて、
無垢の娘等の歎げかひ。

砲の陣は、黑烟
消ゆるまでの込み合ひ。

これは、血の輪　つぶつぶ、
刻を　きざむ　戰ひ。

火矢のなやみ　頻りて、
敵は　胸の　奥　なり。
かしら　觸るゝ　枕に、
こゝろ　責むる　聲　あり。

ひとり　覺めし　夜中
夢は　殘す　人妻、

ほてる　目をば　めぐりて、
正面に　照らす　胸隈。

強き　神を　脊負ひて、
われに　放つ　矢の數——
荒れて　廣き　心野に、
渠女は　またも　叫ければ。

刹那　毎に　わが身の、
死をば　受くる　苦しみ。

欲を断つに　従ひ、
罪を悟る　悲しみ。

この身、粉末に　砕くも、
一つ　毎に　口　あり。
わが血、石に　こほるも、
ひと輪　毎に　耳　あり。

かの女　逃ぐる　その時、
おほひ　得たる　衣　なし。

斯くぞ　われも　追はれて、
隠れ　行かん　空　なし。

いのち　外に　拾ひて
帰る　道の　萬歳、
暗き　室に　わが身を
今や　呪ふ　生涯。

朱のにじみ

あはれ、翁の入れ墨師、
しがめる顔に目は燃えて——
闇にはあらねども、
掟に反く暗き室。

身投げ娘のおもかげを
小針の尖に思ひ出で——

若者面壁の
脊なは、衣なき玉の肌。

衣なき脊なは、妹を
きざむにつれて、痛み行き——
斯くても、『わが脊よ』の
戀しき聲は聽ゆなり。

失せにし人を追ふ罪の、
樂しき胸をいだきつつ——

恐ぶ、は　戀の苦か、
まざまざ　浮ぶ　阿鼻地獄。

『父よ、お房の　罪業は、
斯くて　わが身に　引き受けつ』——
翁は　答へなし、
ただ　差す墨の　匂ふ　のみ。

靈ある　針の　走り彫り、
成れる　姿は　活き活き　と——

裸形の　女神　なり、
情には　滿つる　肉付き　や。

目蓋と　口に　朱を　入れて、
さながら　元の　兒は　生まる——
翁は　睨み詰め、
『淫婦』と　ばかり　罵りぬ。

兄は　その頸　ふり向けて、
若き　血しほ　ぞ　亂れける——

口づけしたる者、
父の眸に燃えて見ゆ。

あけはにじみて脈に散り、
心狂ひて息絶へぬ——
翁は怒りつつ、
おのが喉笛つき刺しぬ。

叙事歌曲

黄金鱗

一　六部姿

鞍馬山さか路をくらみ、
星あかり樹の間を漏れず、
そびえ立つ絶壁のうへ、
谷深き闇に臨みて
耳澄ます六部のすがた。

草も　木も　眠る　深山　や、
夏の夜　の　風は　高ぞら。
寂として、森　の　したゝり、
滴々と　落つる　響き　を
底　までも　立ちて　や　聽ける。

あるは、又、遠吹く　あらし、
おほ楠　の　ほづ枝　に　當り、
その枝　と　戰ひ　過ぎて、
いま更に　共に　語らひ、

山津浪　起す　を　聽くや。

あるは、又、つけ狼　の
岩が根　を　傳ふ　つま音　——
さりとては、いとも　いぶかし、
脊なる　厨子　下に　おろして、
『人　あり』と　闇を　のぞきぬ。

二　わが兒

『ああ、されば、この　谷の底、

なれは　今　棄て兒　に　等し。
年は　まだ　二七　の　つぼみ、
持て囃す　花　とは　成らで、
咲き出でし　遺傳　の　やまひ。』——

『その病　癒す　爲め　なり、
「しばらく」と　母が　御言葉。
四五日　の　備へ　給ひて、
十日　こそ　既に　過ぎつれ、
身は　こゝに　縛られしまゝ。

『約束　の　迎へ　來らず、
わが心　うれひ　に　堪へず。
起たん　にも　からだ　の　繩目、
たゞ　手　のみ　ゆるみ　殘れど、
わが口　に　運ぶ　糧　なし。

『われや、かの　病める　痩犬。
かへり見る　もの　なくも、なほ
家　戀し、山は　おそろし。

されば　こそ、聲を　限りに
日を　叫び、夜を　歎きつれ。』——

『うべや、なれ、いづこの子ぞ』と、
問ふ　六部、答ふる　をとめ。
『わが家は　——　語るも　つらし——
大阪の　藥師　なれども、
今は　京、鴨川づゝみ——
『四條橋、人　こそ　通へ、

うはべ　のみ　映る　その樣
川水　と　清き　を　きそひ、
世は　すべて　つれなく　あれど、
母　のみは　しかある　まじを——』

『さて、父は　如何なる　人』と
問はれては、たゞ　涙　のみ。
『あゝ、君よ、父　ありけれど、
五六年　母　に　去られて、
その故　を　われは　知らじな。』——

『大阪に――もとは藥師の――
その父の里を知るや』と、
かれ、今やすまひ正せば、
『うはゞみの鱗取りなり、
大峯の奥に』とをとめ。

『されば なり、わが娘よ』も、
手を投げていだき締めたり。
『なが母は わが連れ添ひぞ、

十年の仲を棄て、又
いましをも滅ぼさんとす。

（をとめ子は驚ける のみ。）
『聽け、しばし、かれは つれなし。
斯くまで と知らざりける よ、
人の忌む因果の やまひ、
おのれ のみ隱さんと して。

『その昔、われは 國栖人。

三上の奥に笛吹き、
うはばみの眠りを覺まし、
味噌の香に之を招きて、
黒がねの柵を卷かせつ。

『七重、八重、かたき圍みを
やすらかにその柵のうち、
なまぐさき夜風しのびて、
金色のうろこ取るわざ——
樂しきは、戀ゆゑなりき。

『癩病の藥なりとて、
こを賣りに齎らす毎に、
かねよりも、はた器具よりも、
ながの母の若きすがたを
目に映す、これ、さちなりき。

『三とせ覺め、三とせもだえて、
町人の口にもぼり、
わが思叶ひて見れば、

その藥服するものは
戀ひ渡るわが妻なりき。

『斯くてしもなれは生れて、
十までは無事に育てど、
子にもそを飲まし置かん と、
われをまた山に遣はし、
その跡にかげを隱しぬ。

『無情とや、罪とや云はん。

（子のかほの壞れは搖りぬ。）

『されど、わが長の戀人、
この數年、行くゑ尋ねて、
信もなき行者のよそひ。

『わが里の深き森かげ、
黑がねの柵に寄り來て、
味噌の香を聽くうはばみや。
それの如身を削られて、
なほ、われは戀を追ふなり。

『あるは、この山を一と越え、
あなたなる縁者にもやと、
夜を つぎて 坂路を 來たり、
ながの聲を聽き得たるこそ
望みある 手づるなりけれ。』——

『ああ、父よ、なつかしきかな。
この上は、憎まるゝとも、
母に行き、母と住まはん。』——

『愛しき兒よ、とく谷を出よ。
負ひ厨子に入れて運ばん。』

三　負ひ厨子

『ああ、などか見るも物憂き、
五とせを古りし この厨子。
古りにしは五とせなれど、
之を負ふ行者のよそひ、
戀に醉ふ靈には添はず。

『ああ、などか　見るも　物憂き、
五とせ　を　古りし　この厨子。
古りにし　は　五とせ　なれど、
百とせ　を　戀ひも　渡れば、
とこ若の　心に　添はず。

『ああ、われは　この厨子　負ひて
古り行かん　身　ならざりけり。
その　重み　いと　輕らぎて、
わが體　は　血しほ　に　踊り、

わが心　いのち　に　溢る。

『最早や　われ　六部　に　あらず、
いつはり　の　行者　に　あらず。
信仰　も　爲さぬ　もの　には、
法華經　の　一部　も　何ぞ。
佛像　の　薫び　も　何ぞ。

『戀　のみに　われは　あこがれ、
その戀　を　またも　得んとす。

失なひし　ものを　求めて、
それに　また　行きて　會ひなば、
重き物　すべて　無　なれや。

『闇　照らす　力　も　なくに、
觀世音、谷　に　ころげよ。
その底　に　干とせ　を　消えて、
なほ　恨み　あり　とし　云はゞ、
愛しき兒　の　身がはり　と　せん。

『來たれ、兒よ、すでに、この厨子、
經くさき　箱　には　あらず。
五とせ　を　戀　の　ぬくみ　に
あたゝかき　胸　の　うち　なり——
なれを　乘せ、母　に　運ばん。』

四　絶望

鴨川　の　水　いと　清し。
あさゆふ　の　夏　の　ながめ　や、
よしあし　の　映る　まゝなり。

されど、かれ、晝を いい避けて、
夜 こゝに 厨子を おろしつ。

左右への 觀音びらき、
出で來しは 菩薩に あらず。
『父上』と、西を ゆび差し、
『かしこなる 堤の ひかり、
それぞ わが母の 圓窓。
『わが身 先づ 告げ來たらん』と、

その庭の 垣根を 入りて、
をとめ はも おどろきにけり ——
おのが身を 山に 運びし、
その人は 母と 酒ほぎ。

『けふを また 醉ひて つぶしぬ ——
いろ戀の 深きを 見ても、
實に われは 京の 染め屋』と、
紺染めの 手は かきいだく
白玉の ほそき 腕くびぬ。

『こよひ　をば　こゝに　送りて、
あすは　また　よその　花染め――
わが　包む　兒　をば　如何に』と、
白き手　を　邪險に　もぎて、
母の顏　窓に　向ひぬ。

かげなる　は　かしら　引き込め、
その答　ひそかに　聽けば、
『世の戀　に　兒は　付き物　ぞ。

生れなば、また　棄て去りて、
ながら見目　の　若き　を　めでん。』

をとめ子　は　驚き怖れ、
川ばた　に　走り　來りつ。
『父上よ、如何で　しのばん。
われは、かの谷　に　歸りて、
死ぬべし』と、泣きくづほれぬ。

『左まで　母、無慈悲　に　あらじ。

われ、之を　なだめやらん』と、
いけ垣　を　入れば、聽ゆる
うらみ聲。『なれこそ　憂けれ、
遺傳　をば　人に　隱して。』——

『そは　つらし。よし　隱すとも、
知らるれば、かの兒　の　如し。
その父　の　國栖　の　山人、
うはばみ　の　うろこ取り　をも
とく　棄てゝ、なれを　戀ふなり。』——

『その戀　も、黄がね　の　うろこ
飲まざれば、腐る日　あらん。』——
『いな、われは　飲みしに　等し、
身も　魂も　斯く　燃ゆるを』と、
相いだき、口　相吸ひぬ。

うろこ取り、ただ　怒る　のみ。
之を　避け、歸り　來たりつ。
『愛しき兒　よ、われは　二たび
大和なる　深山　の　住まひ、

森の香を寧ろしのばん。』——

川ばたの觀音びらき、
また人の菩薩を閉し、
その父の脊なに負はれて、
行く道のうらみも重く、
深山へと闇を消えたり。

五　水晶洞

大和なる大臺が原、

森の香や深きに凝りて、
吉野川流れそめたり。
その岸をのぼり登れば、
梵字以て手引く洞あり。

その洞に入ること一里、
水晶の眞中をうがち、
なほ奥に流るゝ大河。
黑水の響きも高く、
死の川の瀨にこそ似たれ。

地心より流れ來たりて、
地心へとまたも歸るか。
おほ洞のせまりたる底、
囂々と闇を振ひて、
その響逃ぐる口なし。

この水に手足ひたせば、
手の先の痛みも亡び、
つま先の傷も癒ゆると、

あはれ、また、かたゐの人は
からだをも浴びに來るなり。

國栖人の娘も、こゝに
全復のいのりは久し。
されど、かれ、壞れ增りぬ、
兒を棄てし母を棄てし兒、
父にさへやまひ移して。

あはれ、わが國栖の山人、

つひに　この　御洞の　あるじ。
うはゞみの　體を　振へど、
また　生ふる　うろこの　如く、
朽る身に　戀のみ　光る。

その光　いや若やぐ　を
形なき　手に　あつめ見よ。
この奥の　闇に　供へて、
水晶の　壁に　かがやく、
蠟燭の　火に　こそ　勝れ。

身は　もとの　六部に　あらず。
つどひ來る　人を　計へど、
皆　共に　顔は　むらさき。
その數に　妻も　まじりて、
兒の　そばに　ある　をも　知らじ。

闇の盃盤 終

明治四十一年四月五日印刷
明治四十一年四月八日發行

闇の盃盤

定價金卅八錢
郵税金六錢

著者　岩野美衛
發行者　東京市本郷區天神町二ノ廿五　日高藤兵衛
印刷者　東京市神田區三崎町三ノ一　小西幸吉
印刷所　東京市神田區三崎町三ノ一　日本印刷株式會社（電話本局一八四〇）

不許複製

發行所　東京市本郷區天神町二ノ廿五　日高有倫堂

大賣捌

東京市京橋區尾張町　醫醒社
東京市神田區表神保町　東京堂
東京市神田區裏神保町　同
上田屋
東京市日本橋區箔屋町　前川
東京市日本橋區住吉町　至誠堂
大阪心齋橋南久太郎町　福音社
大阪備後町四丁目　吉岡平助
京都二條川原町　寶文館
名古屋市本町　川瀨代助
同　小澤百架堂
廣島市　積善館
廣島市東横町　友田藤助
岡山市岡山町　奥田金昌堂
周防岩國町　白金日新堂
山口大市町　同支店
高知市種崎町　澤本書店
熊本市新町二丁目　長崎次郎
鹿兒島市松山通り仲町　久永新藏
筑後久留米市　菊竹書店
横濱市　有隣堂
同　勉強堂
同　弘文堂

静岡市　吉見書店
同　明治堂
同　文源堂
横須賀　軍港堂
前橋市曲輪町　煥乎堂書店
越後國水原　西村六平
新潟古町　西村支店
越後長岡　覺張次平
金澤市片町　宇都宮書店
高岡市守山町　學海堂書店
甲府市柳町　朗月堂
信州長野市大門　西澤喜太郎
信州松本町　松榮堂
信州諏訪町　日進堂
仙臺市　鈴本榮三郎
同　藤崎書店
陸中一ノ關町　佐藤喜年
陸奥弘前市土手町　今泉道太郎
青森市米町　同支店
秋田市茶町　成見清兵衛
北海道札幌　富貴堂

安部磯雄著（上製四百八十頁）

新刊

應用市政論

定價壹圓廿錢
送料拾貳錢

本書の論ずる所は都市の發達、市の立法及び行政、市區改正、交通機關、道路掃除、水道、瓦斯、電氣、公園市場、家屋、衞生、教育、娯樂、財政等の諸問題にして、普に歐米諸都市の現狀を詳說せるのみならず、著者特有の識者を以てこれを我國の都市に應用せんことを企圖せり。一面より見れば經世家の爲に社會問題、經濟問題、政治問題の解決を試みたる特種の參考書にして、他面より見れば國民の爲に新奇なる都市問題を紹介したる市民讀本なり

牢井挑水著

新刊

子寶

價郵式拾五錢
送料八錢

愛あり熱あり單へに情を以て寶とせる才子佳人を經とし血なく涙なく唯慾を以て寶とする紳商世子を緯とし、產み出したる一双の子寶、見來つて世を警しむべく、讀去つて人を訓ふべし

小川芋錢著

草汁漫畫

定價金五十錢
送料金八錢

古人曰文章拙を以て進み拙を以て成ると芋錢子の畫は則太拙なり其謂ゆる妙想奇致なる者も則拙中の一味に過ず雅致の士冀くば一本を購ひて清賞を賜へ

田口掬汀氏著（清方畫挿畫三枚）

小說

追恨

定價金壹圓
郵稅貳錢

之れ著者半歲の勞苦を積みて成れる雄篇也、情趣に富める青春の男女を中心として、現代社會の缺陷を描く。靈活暢達の筆、心奥の幽を發き人事の微を穿ちて人と共に眼前に躍動す、著者が牢乎たる勢力を文壇に有する所以此書を讀みて知るを得べし裝釘の美を凝らせる四百二十頁の大作、分量に於て坊間稀くところの書二冊を超ゆ。

伊藤銀月著

小說

出潮

定價六拾錢
郵稅拾錢

時代を描き、時代の人を描き、時代の生活を描き、時代の葛藤を描く、極めて眞摯に、極めて深刻に、且つ極めて妥當に、文章亦平淡の裡に秀潤を包み、著者の或一面を最も遺憾無く發揮せり、之を讀む者必らず其血を沸かして、胸に新潮の昂げ來るを覺ゆべく、而も讀み了つて頭に何物かの殘れるを認め、怡然として獨り滿足せん

伊藤銀月編

近刊

机上圖書館

郵稅四錢函入三圓五十錢

一册廿

本書は漸次刊行して都合十册に至り完結すべきもの完結漸次刊行

男女老少何人も好參書良師友たらんことを明す

の上は『机上圖書館』と表記したる雅致ある箱に收め座右備ふべく、街くも書籍に乏味・實益とを求めんとする時之を開けば各人各別の需要を滿たすべき資料を此中より見出こと容易に實に坐ながらにして圖書館に入ると同一の結果を得ん、豈空前の有用書にあらずや、但し書名及び內容の各別と其發刊の順序とは追つて之を廣告すべし

伊藤銀月著　小杉未醒畫（挿繪十枚）

新譯水滸傳

水滸傳は支那の叛骨養成書也其革命經也風雲疾急にして革命の火氣大陸に欝積する今日、本書は新に出でたる物の如く時代の人に歡迎せらる、朝鮮より延いて支那をも我と混一視するの抱負ある日本男兒は必ず之を讀むべしされど馬琴蘭山の舊譯は唯だ其皮相のみ銀月君が言文一致の斬新なる譯文成りて原著却つて顏色を失ふを見る未醒君の挿畫と相俟つて現代第一の奇書！

田口掬汀氏著　製本優美

小說

獨木舟

定價金四拾五錢
郵稅金六錢

一枝の彩管を鑿となして喬木に比ぶべき社會を刻せる獨木舟は千樣萬態の表跡を印して、文海の潮に浮ばんとす。理性の閃めき、情の影　交互錯綜して究むるところを知らず、痕に痕の味あり、一跡に一跡の趣あり、人情の活動に甚深無限の教訓を聞かんとする者は必ず此書を讀まざる可からず、敢て江湖の清鑒を待つ。

獨逸哲學博士ドイセン原著　高橋五郎譯

近刊

古今東西 哲學通解

哲學は其範圍の濶大其問題の夥多其意義の深遠往々學者をして絶望の叫聲を發せしむ適ま少數之を究むるや忽ち厭世悲觀に陷りて往々自殺に安心を求めんとす然れとも之れ哲學の十分領會せられざるより生ずる弊なり茲に獨逸の哲學者ドイセン博士は哲學に於ては古今東西を窮め就中印度哲學の蘊奥を究め純正哲學美學及び倫理に三大別して詳密に哲學の大體を描寫し哲學の何物たるやは氏に至りて初めて萬人の領會する所となりぬ高橋先生該書を飜譯し幾百萬の哲學志望者を滿足せしめんとす

徳田秋聲著（上製美本）

近刊

小說 母の血

定價七拾錢
郵税拾錢

此篇題して「母の血」と云ふ。抑も如何なる母の血をか享けたる。汚血か、毒血か、將た惡血か。著者の靈筆に描出されたる幾樣の人物と共に此の一大雄篇は成れり。秋聲子が一年有餘の苦心に成れる新作は是なり。

齊木仙醉對佛國神學教授ボア博士

新刊

三位一體論

定價貳拾錢
郵税金四錢

海老名氏對植村氏の三位一体論爭は一時宗教界に大波瀾を生じたりき神秘的なる此の問題は未だ解決されたりと云ふべからず、齊木仙醉氏は萬國學生基督教青年大會に公開狀を發して教會神學の三位一体論の誤謬を縱横に論議せり大會側にては佛國ボア博士之に答辯せり、斯くて兩氏互に駁論す、自稱預言者なる齊木氏勝つか、正統派の大家ボア氏勝つか、讀者之れが行司となりて孰れに團扇を擧ぐる又妙ならずや

高橋五郎先生著

近刊

英語實驗百話

定價拾五錢
郵税六錢

高橋先生英語に於ては徹頭徹尾獨學を以て之が蘊奥を究め內外人をして均く舌を捲しめ高橋流の縮時術を縷述し聽者をして屢ば膝を打ち快と叫ばしむ加旃其百話たるや乾燥無味の術語に非ず形容無盡奇趣眞に横生す加ふるに世界語の比較論及異同辯を以てしエスペラント外に一層新らしき世界語迄も存在する事を說きたり實に新好著と謂はざる可らず青年諸氏の好指針　教員諸氏の好參考何人も欠く可らざるの良書也

田岡嶺雲著

新刊

霹靂鞭

價四拾五錢
郵税金六錢

文壇の革命兒嶺雲が滿腔の不平は終に自ら其肺を爛ちし今病を瀨戸內海白沙青松の間に養へりと雖ども元氣猶毫も衰へず茲に渾身の心血を傾け盡して一書を著はす題して霹靂鞭といふ、收むる所「近松の心中物」を初めとして數十篇悉く時代に反抗し文明を呪詛する著者が眞情を眞寫せるもの世の浮華輕佻なる當代の文學に慊焉たる者は來つて此の、世と相容れずして三十九年を四海に放浪し餘命甚だ長からざる天才者が熠と燃ゆる熱烈の言を聽け。

田口掬汀氏著

新刊

悲劇 熱血

定價參拾錢
郵税金六錢

此書は掬汀氏か伊井蓉峯一座の請ひを容れて特に執筆せられたる脚本なり、脚本欠乏の聲ある今日此書が劇壇の要求に副へる事言を俟たず又單に讀物として見るも優れたる小說に等しき興味を與へん。

川上眉山著（頁數三百卅頁上製頗ル美本）

新刊

觀音岩

後編
定價八拾錢
郵税拾錢

江湖の喝采を博し、文壇爲めに騷然たりし前篇は、社會に對する暗鬪の一半を描きたるまゝ、讀書界に其後篇を渴望せらるゝ事已に一歲、今茲に此篇成りて明治文壇の一大傑作遂に全し、請ふ愛讀の榮を給へ。

小栗風葉著（美術的製本）

新刊

小說 新粧

價四拾五錢
郵税金六錢

或は美人の粧を凝らして翠帳を出で、或は壯夫の劍を按じて陣頭に立つ、彼に麗情あり、燭を秉つて夜見る海棠の花、此に雄姿あり、雷雨忽ち去つて皓月中天に懸る滿幅の綺、風葉子が文壇に盛名を馳する所以のものは、實に此新粧あるを以てす。

大町桂月著

新刊 **代表日本人** （製本美）

定價八拾錢
郵税金八錢

日本人を化せしは區々たる教義にあらずして事實也歴史也國體也祖先の發揮せる國民性也我が國には儒教佛教以外一種の武士道ありて今日の發展を致したる事今更言を待たざる所なるが武士道の眞相を知らむとせば理論のみにては不十分也之を人物事實に徴せざるべからず此書日本國民の特性を發揮せる人を撰びて其面目を描き日本國民の前路に光明を與へ教訓を與う一風變はれる日本國民の歴史也兼ねて道德經也。

文學博士 桑木嚴翼著（總クロース製本美）

性格と哲學

價壹圓廿錢
郵税金拾錢

本書は高妙なる哲學宗教の問題より卑近處世法並に女子問題を解釋し其他戯曲文藝等廣大なる範圍に亘り政齊愼密なる評釋を下せるものにして論理の井然たる文章の精采ある誠に學界の珍書たるを失はず好學の士は本書の教訓に依り必らず啓發する所多きを信ず。

大町桂月伊藤銀月刪修天籟篇

再版 **文士寶典**

定價五拾錢
郵税金六錢

東西諸文星の名篇玉什を襍め更に之を嚴密なる審美眼を以て、不朽の文字のみを撰擇し、文勢を保ち神韻を失はざる、敎簡の適度に於て　緊密に取捨按排し、文士並に文士たらんとする人の爲に、最良なる一卷の完備せる理想的資料寶典を編纂したる者也、之を繙けば、深刻腸を抉ぐる者、天衣無縫なる者　香氣鼻頭に湧く者、奇句警語應接に遑あらず。

小栗風葉著　鏑木清方畫（上製美本）

參版 小說 **十七八**

價七拾五錢
郵税金十錢

櫻は三月菖蒲は五月女盛りは十七八げに少女は人生の花なり而して少女の可憐なる心事と態度とは唯だ多情多恨の才子よく之を描き多情多恨の才子よく之を愛讀す風葉先生の濃麗華を味はゝんと思ふ人大方の君子は請ふこの篇を讀まれよ。

綱島梁川譯（製本美）

近刊 **ルナン耶蘇傳**

定價
一圓五拾錢
郵税十四錢

此書救主生涯、其懷きし神の國の思想　天父の觀念を叙べ、奇跡を論ふ、他の宗教との關係を明にし、其國家觀社會主義觀また此間に隱見す、自由詩究の精神一貫して批評の鋭刃觸れざる所なく、之がため一時歐米基督教界を震動して顏色失はしめたりと雖、世界史上に於ける耶蘇の位置は寧ろ之により確められたりと言ふべきなり梁川先生の爛熟瑰麗　現代獨步の筆を以て此書を疏して世に問はる。世界の認めて耶蘇傳の白眉となすものと模範的美文とは之によりて吾邦文壇に供へられむとする也

川上眉山著○清方畫（上製美本）

三版 **觀音岩**

前編

定價八拾錢
郵税金拾錢

同情豊富　文致清艶
思想高逸　裝釘美麗

これ本書の特色也。

大町桂月序　有倫堂編纂

再版 **明治大家文集**

定價八拾錢
郵税金拾錢

明治の昭代文運の勃興前古其比を見ず今一々諸大家の著作を讀み其風格を知るは容易のことにあらずこの書論文といはず美文といはず小說といはず苟も文章を以て一家をなし特色を有せる文豪を撰びまた文豪の特色を發揮せる名篇を選び明治の文章家を集つめて此の書にあり之れ明治文學の縮圖にして一讀の下に以て明治の諸大家の面影を伺ふべく文壇の一大偉觀たるを失はず文を學ぶ人にありては以て眞模範とするに足る右益〻して且つ興味ある良書なり。

饗庭篁村著　○鏑木清方畫（上製美本）

三版 小說 **不問語**

（附　大詩人出現　鹽原遊記）

定價
金七十五錢
郵税金十錢

竹葉の蟋蟀地仙と化して氣を吐くこと虹の如く籔中の彌二郎壳鍬砲を發して僅に雀を驚かす、しかれども其光り天に沖り　其響き地を動かす、これ著者の手腕にあらずして其の不問語なり。

綱島梁川著（菊版總クロース頁數約千頁）

四版 **梁川文集**

定價 二圓廿五錢 郵稅拾五錢

梁川綱島先生高邁博大の識、嚴理到の言、恰も燭を把つて照すが如しと評せられ、先生の談理是れ能とする學者に非ず、一面冷靜細緻の頭腦を備へたる倫理學者にして他面別に抑ふ可らざる詩人の熱情を宿して天地を戀ひ此戀を滅へて日夜に瞑想し日暮に修養止まざる哲人也解脫の人也、理を盡すれば簡淨にして靈活感興を遺れば深邃にして豐麗其想獨特、其文獨特、卓然一家を成して現代思想界の一角に一く可らざる自系の領を占めて妄に他人の追從するを許さず是れ筆に非ずして人格なれば也弊堂幸に玉稿を請うて上梓するの榮を得たり敢て先生の高風を慕ふ所の諸君子に薦む。

海老名彈正先生著

三版 **基督教本義**

上製六十五錢 並製五十五錢 郵稅金八錢

基督教の本義果して如何之れが明白なる解答を與ふるもの古來宗教史上に光明を放てる豫言者教師教祖の抱懷せる思想經驗に依らざるはなし本書は基督教界の明星海老名彈正先生卓拔の識勇健の筆を以て上はモーゼより下はルーテル、シュライエルマッヘルに到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教の本義を說明せられたるもの抑幸に愛讀の榮を賜へ。

文科大學講師 夏目先生校閱 上田先生序文 ロイド先生 チャールス、ラム著 文學士 小松武治譯

八版 標註 **沙翁物語集**

定價七拾錢 郵稅金拾錢

本書は沙翁戲曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロメオ、ジュリエット及冬物語等通じて十編の物語を拔萃し精緻なる飜譯を試み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附錄を以てす。特に文科大學講師先生の校閱を仰ぎたる者にして苟も沙翁戲曲の何たるやを窺はんと欲するの士は須らく一本を購ふて座右に備ふべき也。

匿名隱士著

八版 **破天人論**

定價參拾錢 郵稅金四錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議的に堂々駁論を試み三一哲學の宇宙觀と人生觀とを鼓吹したる壯快の書也本書の出づるや全國各新聞雜誌の大好評を博し今や第八版を發行せり以て本書が如何に愛讀せらるゝかを知るべし。

大町桂月著

十二版 **わが筆**

定價 金四拾五錢 郵稅金六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓あり才氣あり霸氣あり或は洒脫に或は沈痛に或は眞面目に或は詼諧に短くして寸鐵人を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに一脈の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆を以てす家庭學校會社及び文學等に關する卓見到る處に充ち才情掬すべき美文もその間に光彩を放つ天地間有數の快文字也

泉鏡花著○淸方畫（上製美本）

再版 **小說 無憂樹**

定價 金八拾五錢 郵稅金拾錢

著者積年の思を籠めて、はじめより單行一册として新に筆を取りたるは、此の編を以て嚆矢とす、願くば紳士淑女をして良匠が彫心の經營に成りて、世に美しき戀を秘めたる一大宮殿の裡に遊ばしめむ。

文學士 久保天隨著

紀行文集 **山水寫生**

定價 金四拾五錢 郵稅金六錢

天隨氏の紀行文は 世すでに定評あり。泰華を眼前に仰ぎ、溟渤を脚底に湧かしむるもの、これ其文の特色にして、決して他人の模倣を容れざるものとす。本書收むるところは、長短無慮二十餘篇、その地を以てすれば、南鬼界の天に臨み、北蝦夷の境を踏み、實に著者帳中の秘たるものなり。造化の工を讃賞し、天地の美を景仰するもの、机上この書なかるべからず。

大町桂月著

七版 **我が文章**

定價 金四拾八錢 郵稅金六錢

桂月先生の文章愈々熟して縱橫自在眞情流露し行く處に行き止る處に止まり些の衒ふ所なく苦む所なく直ちに人を以て文を遣り洒落飄逸に快闊にして男性的意氣を發揮し而かも言外に情緒溢る文此に至れば聖なり先生の文の如きは、實に當代の逸品なり

饗庭篁村著○清方畫（上製美本）

再版 小説 **竹影集** 定價 金六錢五 郵 金拾錢

戀と慾との二筋道識かは踏迷はぬ者あるべきその好き道しるべの「虚空塵」情義うるはしく花あり實あり血あり涙ある「山懷」前者は理情兼ね深く後者情趣偏に掬すべし著者が盆るゝ計りなる同情は如何なるものをも照さで止むまじく見えて嬉し

文學士 久保天隨著

文壇獅子吼 定價 金四拾五錢 郵税金六錢

博大精該の才識を以て、不偏不黨、文壇の趨勢を論斷し、毫も顧慮するところなきは評論家としての著者の態度なり、その問題は文學・史學・宗教・道德の諸方面に亘り虬龍の片甲、なほ能く雲を成す、一卷收むる處、凡そ七八十篇長短錯落、理致あり、情趣あり 眞個人間に稀見るの好文字、

伊藤銀月著

研究會 **高原生活** 定價四拾錢 郵税金六錢

嶄新の思想奇創の文字を以て文壇を風靡せる銀月君、就中社會と人間とを觀察するに於て別個の眼孔を有すと稱せらる、此書最も適切に君の長所を發揮せるものにして、富士の裾野と人間生活との關係の現在及び將來を、非凡の才力を以 描寫し出だす、實 是れ絶好の題目にして當世未だ見ざるの珍書、社會と人間との新なる研究法を教ふるもの也

大町桂月著

六版 **家庭と學生** 定價 金參拾八錢 郵税金六錢

著者申す、我れに三男一女あり其れを新くは、しつけむ、我れも斯くは覺悟せむと心に期するのみにて能く實行せむと斷言し得べき身の上なられど家庭教育の大切なることを今更のやうに感じて愚者の一得もやとの世の青年の男女の前に呈し合して世の父兄の前にも呈する也

德田秋聲著

小説 **花たば** 定價 四拾五錢 郵税金六錢

此に美しく束ねられたる花の數は何々ぞ。紅白紫黄必しも萠綠の妙を悉さゞれども、清き自然の野趣は此の一束に盡きたり。全篇長短合せて十三章、總て作者獨擅の詩材にして、亦獨得の文字なり、秋聲子が眞技倆と佳賞を窺はむには、此篇を措て他に求むべからず。切に江湖の眞摯なる讀者の高聲を希望す。

大町桂月先生選

四版 第壹 **時代青年文集** 定價 金四拾錢 郵税金六錢

大町桂月先生選

第貳 **時代青年文集** 定價 金四拾錢 郵税金六錢

桂月先生最も青年を愛し指導教訓須臾も懈らず爰に滿天下青年諸子の傑作數千篇中より其尤なる者を拔き嚴正なる批評を加へて時代青年文集を編せらる收むる所叙事抒情あり論説書簡あり將た新體詩あり成有絢爛花の如く情熱火の如し以て青年の煩悶を暨すべく元氣を鼓舞すべし附錄には當代諸大家の名篇を添へて錦上更に美花を飾る

文學士 久保天隨著

再版 美文韻文 **夕紅葉** 定價 三拾五錢 郵税金六錢

著者の美文は、潑墨の山水の如く、氣韵生動、豪宕の氣、筆端を繞り、かの蝶蕚を歌ふ底の軟弱文字に非ず。三生石、高遠城の如き、事すでに奇に、文亦た雋、人をして、覺えず、起舞せしむ。韻文には、拔都征歐の歌、蒙古の大英雄を謳歌し、一唱腕鳴り肉躍る。壯大雄濶、大空を横絶するに似たるもの、唯だ本書に於て之を觀るべし。

饗庭篁村著

再版 紀行文集 **天下泰平** 定價 金四拾五錢 郵税金六錢

文章絢爛の極致に入り閑淡にして味深く眼前の景口頭の語自然に出で、沖淡深粹最も及び易からざるは篁村先生の紀行文也本書題して天下泰平と云ふ命題既に洒脫也中に收むる所悉く先生が輕妙老熟の筆致以て山水美人事美の意態景趣を盡せる者也殊更に奇巧を求めざる紀行文の淡粹なる趣を味はむとする人士は請ふ一本を備へよ

大町桂月先生　中内蝶二先生合著

六版

少女と山水

定價卅五錢
郵税金六錢

人生の美凝つて少女に在り自然の美凝つて山水にあり山水の美や豪宕にして洒落少女の美や優婉にして可憐蝶二君の文少女の嬌態を描きて筆底に脂粉の氣あり桂月君の洒脫の文山水の幽趣を寫して雲烟紙表に浮動す双々相對して作者各得意の筆致を縱にし高尚優雅家庭の讀物ともすべく文章の手本ともすべし腥風血雨に惱める亜國の讀者諸賢幸に這般清麗の文字に接して宇宙の美を味ひ給ふべき也

改訂五版

姉崎博士序　萬朝報記者茅原華山著

向上の一路

定價參拾錢
郵税六錢

向上の一路に就かんと欲する者は此書を讀め我國に於て哲學的に社會主義を建設したるは此書を始めとす▲安部氏の駁論及著者の駁々論は益々新社會主義の本領を發揮し共に光彩陸續たり▲近時の一大著述にして情理該れ臻る者は此書なり敢て江湖の讀書子に勸む

海老名彈正先生著

宗教々育觀

定價
金五拾五錢
郵税金八錢

基督教の三大綱
（其一）神觀　（其二）世界觀　（其三）人觀

宗教界の明星として名聲天下に轟けるる海老名先生は本書に於て教育問題に關する所信を告白せられたり其滿天下の耳目を聳動するに足るものあるや必せり見よ先生が該博の識公明の論一讀人をして快刀思想界の亂麻を截つの感あらしむ而かも本書の内容は單に教育問題に限らず廣く宗教の根本義に對する先生最近の思想を發表せられたるもの實に濛々たる我邦思想界に於ける一大探海燈たるや疑を容れず大方の識者請ふ刮目して見られよ

四版

大町桂月先生序　角金潮聲著

宇宙と人生

價貳拾五錢
郵税金四錢

宇宙と人生の問題豈常人の言ひ易き所ならんや玆に哲學者あり宇宙の幽を闡き玄を究め森羅萬象の生滅變化の本源に溯りて人生の眞諦を内觀直視せんとす玆に詩人あり天地の美に動眞に肉薄して以て人生の本義を直觀捕捉せんとす本書は哲學者の想と詩人の情を文に綴りしもの古高の韻、艶麗の致、讀者をして三唱せしむ宇宙と人生とを謳はんとする者は來りて本書を繙け。

醫學士　佐々木多聞著

再版

新化粧

價金四拾錢
郵税金六錢

歐米化粧術の粹を參酌し日本古來の化粧を折衷し拾四章に別ちて最も進歩せる化粧を説く通俗文章趣味ある研究美術的化粧を欲する者は此書を讀め化粧室の飾本として必ず一冊を備へよ世にありふれたる俗惡淺薄なる化粧書と同視する勿れ

醫學士　佐藤得齋著

美的衛生

定價
金四拾錢
郵税金六錢

著者一種の詩眼ありて、有ゆる天然人事の美を捉へ、專門の衛生學に配合調和し、熟練十二分、極めて美的なる衛生の新方則を唱導せり、一面より見れば、美的衛生は人間の生活を美的ならしめんと試みたるもの一種の美的生活論也、論旨の美、文章の美相俟つて、之を醫學界の珍とすべく、又文壇の奇とすべし

本居豐穎撰

紫文摘英

定價
金參拾五錢
郵税金六錢

源氏物語が千古の大文學たるは今更贅言を要せず而も之を教科書に使用せしむるには餘りに浩瀚に過ぎ又事實に悖倫の箇處多く女子教育家の齊しく遺憾とするところ源氏博士の稱ある本居先生大に之を慨し五十四帖を通じて其英を摘み蕪を去り最も聯絡と校訂に意を用ひ「紫文摘英」を編せらる即ち是れ源氏全篇の縮圖にして一讀其大意を覩ふべく併も紫文の妙は此上下二卷に盡くせり各種學校の良教科書たるは勿論苟も國文學に志あるの女士は必ず一本を備へざるべからず乞ふ高讀の榮を給へ

半井桃水著　清方畫

再版

小說　慰問袋

定價
金七拾五錢
郵税金六錢

硝烟彈雨の下に在りて勇將猛卒を樂しましめし慰問袋に戰時裏面の材料を收めて洽く讀者に分たんとする桃水氏が從軍土産

海老名彈正先生著

人道

定價金拾錢
郵稅金二錢

先生時局に關し大に感慨するところあり其の豫言者的熱識を傾盡し集渾壯大萬丈の光焰を吐き以て日露戰爭の意義を高め國民の元氣を鼓舞作振せんと欲す乃ち宗教家の戰爭觀を告白せんとす啻に軍國々民の必讀書たるのみならず軍隊慰問の好册子なり

景山英子著

四版 妾の半生涯

定價金參拾五錢
郵稅金六錢

大井憲太郎等と共に有名なる大阪事件に與せし女傑景山英子は即ち本書の著者也彼女の幼少が鄕里の才媛として如何に譽高かりしか彼女如何にして大阪國事犯に與せしか在獄三年の生涯は如何なりしか如何にして情人と離れ如何にして良人を得たるか赤貧なる慈母として悲哀なる寡婦として多恨なる彼女の生活は如何なりしか本書は實に其典折波瀾錯節纏綿ざる一箇の大悲劇を描けり也

泉鏡花著○淸方畫

參版 小說 誓之卷

定價金七拾五錢
郵稅金拾錢

これ鏡花先生があふるゝばかりの同情を以て天と、地と、人に、訴へて同情を求める、初戀の詩篇也。

茅原華山編纂

我と人

定價二拾錢
郵稅金六錢

本書は萬朝報の黑岩先生を初め諸家の談論文章を筆錄したるものなり、柳は綠花は紅、是書を讀めば諸名家と共に一堂春風の中に座するの感あるべし

ヂョサイア、スツロング原著、石川三四郎譯

二十世紀の大覺醒

定價三拾錢
郵稅金四錢

本書は基督の福音教徒の使命並に天國の根本原理に亘り新解說を試み靈活剛健なる信仰を鼓吹せるものなり

萬朝報記者　茅原華山編纂

靑年と詩吟

價二拾五錢
郵稅四錢

本書は茅原華山氏が各諸先生に囑し、各々其愛誦さる、漢詩、和歌、新體詩、俳句を撰び編纂せられたるの書日夕此卷を抱いて諷誦せば其品性を修養し其志氣を砥礪するの功蓋し計るべからざるものなり

基督教講壇集

定價七拾錢
郵稅金八錢

本書は眞に生命の麵麭靈活の根原たる現代基督教界のあらゆる大家の說教を網羅揭載したる雜誌講壇の全部を合し改册せしものなり居ながら各大家の口演を聽問する好册子其內容に於ては活水如湧の感あり乞ふ愛讀の榮を給

泉鏡花著

小說 ななもと櫻

定價四拾錢
郵稅金六錢

鈴木秋子女史著

再版 軍國の婦人

定價廿八錢
郵稅四錢

苦學社編輯

苦學の伴侶

定價金三拾錢
郵稅四錢

橫山筆助著

十版 成功したる催眠暗示術 應用自在

定價參拾錢
郵稅四錢

山口先生序　シルレル原著　齊木仙醉譯

接神術

定價廿貳錢
郵稅金四錢

杉山先生書簡　黑澤辰三郎編

日本名家手簡

定價參拾錢
郵稅金六錢

齊木仙醉先生譯

トルストイ教訓小說集
定價參拾錢
郵稅金四錢

加藤直士譯

トルストイの日露戰爭觀
定價參拾錢
郵稅金四錢

高橋五郎著

杜伯品藻
トルストイ伯の主義人物を評す
價參拾五錢
郵稅金六錢

蘆風秋元喜久雄譯

四版 獨逸詩粹 **紛紅集**
定價卅五錢
郵稅四錢

文學士 小原無絃譯

原文對照 **バーンスの詩**
定價三拾錢
郵稅金四錢

文學士 小原無絃譯

原文對照 **シェレーの詩**
定價金三拾五錢
郵稅金四錢

泡鳴著

新體詩集 **悲戀悲歌**
定價卅五錢
郵稅四錢

泡鳴著

新體詩集 **夕潮**
定價卅五錢
郵稅六錢

細越夏村著

新體詩集 **靈笛**
定價三拾錢
郵稅四錢

秋元蘆風譯

獨詩 **野葡萄**
定價卅五錢
郵稅金六錢

○原文對照○卷末に評註を附す